

1. はじめに

- (1) 本発表の構文：①スキーマの抽出と事例の具現化による構文（間）ネットワークを構成し、②動的な拡張・創発の基盤となる（cf. 村尾 2013）。ただし、日本語の記述的研究の知見を構文文法の枠組みで捉え直そうとするものであり、構文理論志向的ではない。
- (2) 本発表の立ち位置：感情感覚形容詞の連用（副詞的）修飾用法について、連用修飾の観点から検討し、形容詞分類からのアプローチとの補完的な構文構成の視座からの分析を提案する。
- (3) 本発表のキーとなる現象と論点
- 涼しい風が心地よく吹く。【感情感覚形容詞・情態的連用修飾・話者認識】
 - 涼しい風が心地よく吹く。⇔ 涼しい風が吹いて、心地よい。【連用修飾と述部の用法交替】
 - 感情感覚形容詞の連用⇔述部の用法間ネットワーク、話者読みを成立させる構文的背景

2. 感情感覚形容詞の用法と構文間ネットワーク

- | | |
|-------------------------------------|---------------|
| (4) 涼しい風が吹くのを感 ^じ て、心地よい。 | 述部：認識者＝動作主＝話者 |
| (5) 涼しい風が吹いて、心地よい。 | 述部：認識者＝動作主＝話者 |
| (6) 夏子が心地よく昼寝する。 | 連用修飾：認識者＝動作主 |
| (7) 涼しい風が心地よく吹く。 | 連用修飾：認識者≠動作主 |
| (8) 涼しく心地よい風が吹く。 | 連体修飾 |

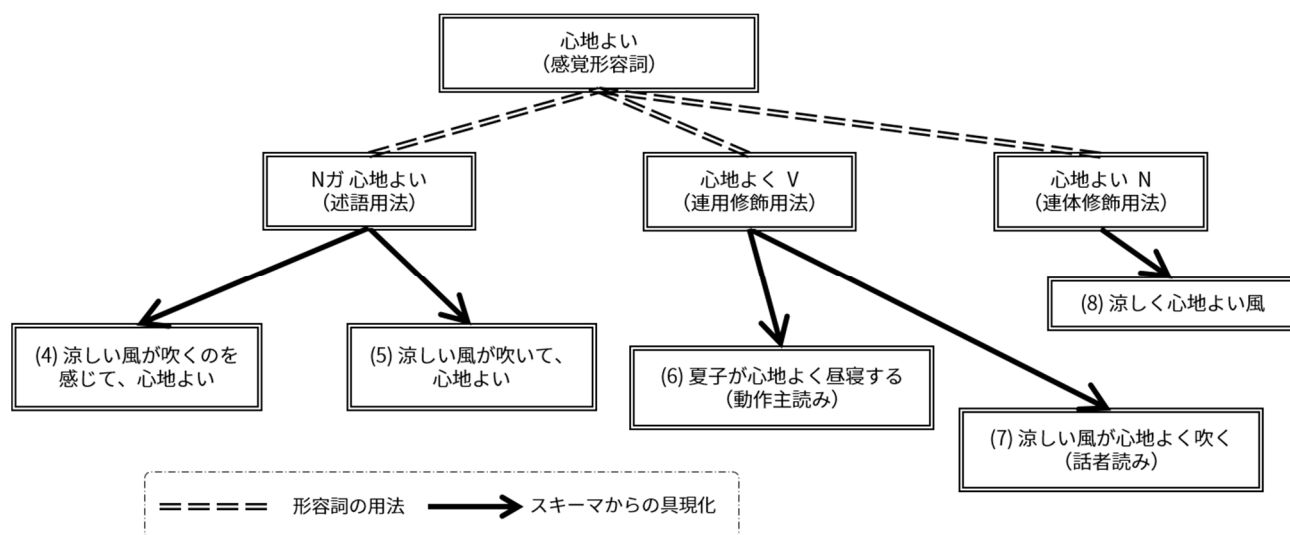


図 1：形容詞の用法のネットワーク

感情感覚形容詞には述部用法・連用修飾・連体修飾の用法がある。連用修飾用法では、感情感覚「心地よい」の認識者が動作主という読み（以下「動作主読み」）と動作主でない（話者または一般的語義）という読み（以下「話者読み」または「一般読み」→§ 4.2）がある。述部・連用修飾・連体修飾の3用法の知識

3. 形容詞連用修飾の構文ネットワーク

-
- ```

graph TD
 A["(ア) Adj-ク V"] --> I["(イ) Adj-ク 感じる"]
 A --> U["(ウ) 心地よく V"]
 A --> E["(エ) Adj-ク 昼寝する"]
 A --> O["(オ) Adj-ク 風が吹く"]
 I --> K["(カ) 心地よく感じる"]
 U --> K
 U --> Q["(ク) 心地よく風が吹く"]
 E --> Ki["(キ) 心地よく昼寝する"]
 O --> Q

```

(18) 肉料理をおいしく撮る方法 (WEB サイト) / チーズも小さく入っていて美味しそう (NWJC) / 青く  
つながれ (サッカー日本代表応援コピー) / 小さく運んで大きく開く (収納用品メーカー広告)

広告コピーなどに見られる逸脱的・創発的な事例においてもサマの詳述指定機能は共有されており、形容詞連用修飾のスキーマと具現化のネットワークは感情感覚形容詞の問題とは独立して必要である。

#### 4. 感情感覚形容詞の連用修飾用法

##### 4.1. 動作主読み

- (19) a. ツナサンドをおいしく食べた。                      b. 部下の報告を頼もしく聞いた。  
c. 最新作の長編小説を面白く読んだ。                      d. 母校の校舎を懐かしく眺めた。

感情感覚形容詞が主節のデキゴトによって喚起された動作主の感情感覚を表す（動作主＝認識者（経験者））という読みを持つ情態修飾関係（「動作主読み」）。感情感覚形容詞連用修飾の先行研究の中心的な論点（ドラガナ 2005, 宮腰 2009, 永谷 2015, 村上 2017, 松岡 2017 など）。

永谷（2015）は属性叙述文の可否と対象格の有無などから形容詞を A～D の 4 群に分ける（村上 2017 ソウダによるテストなどから同様に A～D の 4 群に分類する）。永谷も村上も連用修飾用法を形容詞語彙の分類ごとの意味的・文法的性質から分析し、成立の可否などを説明するアプローチを採用する。

##### 4.2. 話者読み

- (20) a. 古びた看板が寂しく立っていた。                      b. 枯れ木が寂しく立っている。  
c. 運命に翻弄されるヒロインを悲しく演じた。                      d. 女将が寂しく笑った。  
e. 花が散った木の枝を恨めしく見上げた。                      f. 涼しい風が心地よく吹いている。
- (21) 形容詞の副詞的用法には 1)動作主が動作中に抱いた認識を表す場合と、2)経験者以外を動作主にし、それが一般にある感情が感じられる様子であることを表す場合とがある。（中略）2)を「外面的様子を表す場合」とする。（永谷 2015: 9）
- (22) 副詞的成分と述語動詞が表す出来事に同時性が認められる（ただし、同時性があれば成立するわけではない）（村上 2017）。

永谷は外面的様子を表す「寂しく」の認識者を動作主以外であるとして話者とは限定せず、感情感覚形容詞の一般的な語義としてコード化されているサマと捉えている（「一般読み」）。この点で、永谷と、村上および本発表は解釈を異にするが、動作主読みとの対立項という理解は共有している。

村上、永谷の連用修飾成分の素体となる形容詞の特徴から情態修飾の連用修飾の適否・可否を説明する分析は従来の連用修飾研究では不十分だった論点であり、用法記述で説得的な分析を提示している。一方で、連用修飾の読み（用法）については既存の分類や知見を所与のものとして受け入れるに留まる。そして、「心地よい」は永谷（2015）のテストにかけると形容詞 D（「難しい、大きい」など）、村上（2017）では B 群（感情喚起の対象志向の感情形容詞）に分類されると考えられるが、これが本発表の論点を十全に説明しうるのか定かではない（永谷の分析では形容詞 D は動作主認識は表せないとされるが「心地よく」は可能である→(6)）。

##### 4.3. 評価注釈成分（加藤 2000, 工藤 2016 など）

- (23) a. 珍しく会社の飲み会に参加した。                      b. めでたく月刊誌に連載が決まった。  
c. あっけなく犯人が捕まった。
- (24) 文の叙述内容に対する話し手の評価を表す、先行する独立成分（工藤 2016 : 62）

話者読みはデキゴトに内在しないサマを参照する点で一般的な情態修飾とは異なる。同時に、デキゴトに内在する意味領域を詳述指定するという点で、一般的な評価注釈成分の連用形形容詞とも異なる。感情感覚形容詞の連用修飾用法話者読みはこの点で、特徴的な性質を持つ連用修飾であるといえる。

| 修飾関係のタイプ | 情態修飾        | 話者読み   | 評価注釈成分 |
|----------|-------------|--------|--------|
| 修飾成分の意味  | デキゴト内在      | デキゴト外在 |        |
| 詳述対象     | デキゴト内在の意味領域 |        | デキゴト全体 |

表 1：情態修飾・感情感覚形容詞連用修飾・評価注釈成分の特徴

形容詞連用修飾の用法を分析するとき、永谷、村上の形容詞分類からの分析は説得的だが、連用修飾の機能、構文・用法間の関係などの論点には射程が及ばない。別途、補完的なアプローチを試みる余地がある。

## 5. 感情感覚形容詞の述部用法

### 5.1. 対象事態タイプ

- (25) a. 着物を着られて、うれしかった。                      b. 太郎にだまされて、悔しかった。

前件の出来事（着物を着られること・太郎にだまされること）が感情感覚の対象（感情感覚を喚起するもの）であるタイプ（村上 2017：121）。

### 5.2. 対象認識読み

- (26) a. 合格したと聞いて、うれしかった。                      b. 京都弁を聞いて、懐かしかった。

前件の動詞が感情の対象を認識・受容する段階の動作を表し、認識した内容が感情の対象（感情感覚を喚起するもの）であるタイプ（ibid.：122）。

## 6. 感情感覚形容詞の構文・用法間ネットワーク

### 6.1. 人称制約の継承と述部／連用修飾の交替

感情感覚形容詞の述部用法（対象認識・対象事態）と連用修飾用法（動作主読み・話者読み）はパラフレーズとして用法間で交替できる事例がある（井本 2018b）。

- (27) a. 涼しい風が吹くのを感じて、心地よかった。                      述部：対象認識  
       b. 涼しい風が吹いて、心地よかった。                              述部：対象事態  
       c. ⇔ 涼しい風が、心地よく吹いた。                                  連用：話者読み  
       d. ⇔ 涼しい風が吹くのを心地よく感じた。                      認識動詞構文補語・動作主読み
- (28) a. 古びた看板が立っているのを見て、寂しかった。                      述部：対象認識  
       b. 古びた看板が立っていて、寂しかった。                      述部：対象事態  
       c. ⇔ 古びた看板が寂しく立っていた。                              連用：話者読み  
       d. ⇔ 古びた看板が立っているのを寂しく感じた。                      認識動詞構文補語・動作主読み

これは一般的な様態読みや結果構文読みの情態修飾では見られない（「×夏子が速く走った⇒夏子が走って、速かった。／×壁を赤く塗った⇒壁を塗って、赤かった。」）。また、感情感覚形容詞の述部用法には人称制約があることが知られるが、連用用法もこの制約を共有している（村上 2017：208-209）。

- (29) a. (私は) 母からの手紙を読んで、{うれしかった／??うれしそうだった}。 述部  
 b. (私は) 母からの手紙を {うれしく／??うれしそうに} 読んだ。 連用
- (30) a. あなたは、母からの手紙を読んで、{\*うれしかった／うれしそうだった}。 述部  
 b. あなたは、母からの手紙を {\*うれしく／うれしそうに} 読んだ。 連用
- (31) a. 花子は母からの手紙を読めて、{うれしかった／??うれしそうだった}。 述部  
 b. 花子は母からの手紙を {うれしく／うれしそうに} 読んだ。 連用
- (32) 主体が話者の文は〔感情形容詞が：井本注〕適格になる。主体が第三者の場合は語りの文しか許容されない。主体が聞き手の断定の文は非文になる。（中略）人称制限は、述語においてみられる現象とされているが、副詞的用法にも見られるのである。（村上 2017：ibid.）

感情感覚形容詞の述部／連用修飾の用法間の交代では人称に関する文法制約も継承しているといえる。

## 6.2. 感情感覚形容詞と連用修飾の構文・用法間ネットワーク

述部と連用修飾が用法間で交替可能で、述部／連用間で人称制約を継承していることから、感情感覚形容詞の述部用法と連用修飾用法の間には用法間のネットワークがある。一方で、連用修飾用法は形容詞連用修飾の構文ネットワークの具現化の一事例となる（図3）。図3では感情感覚形容詞の連用用法と形容詞連用

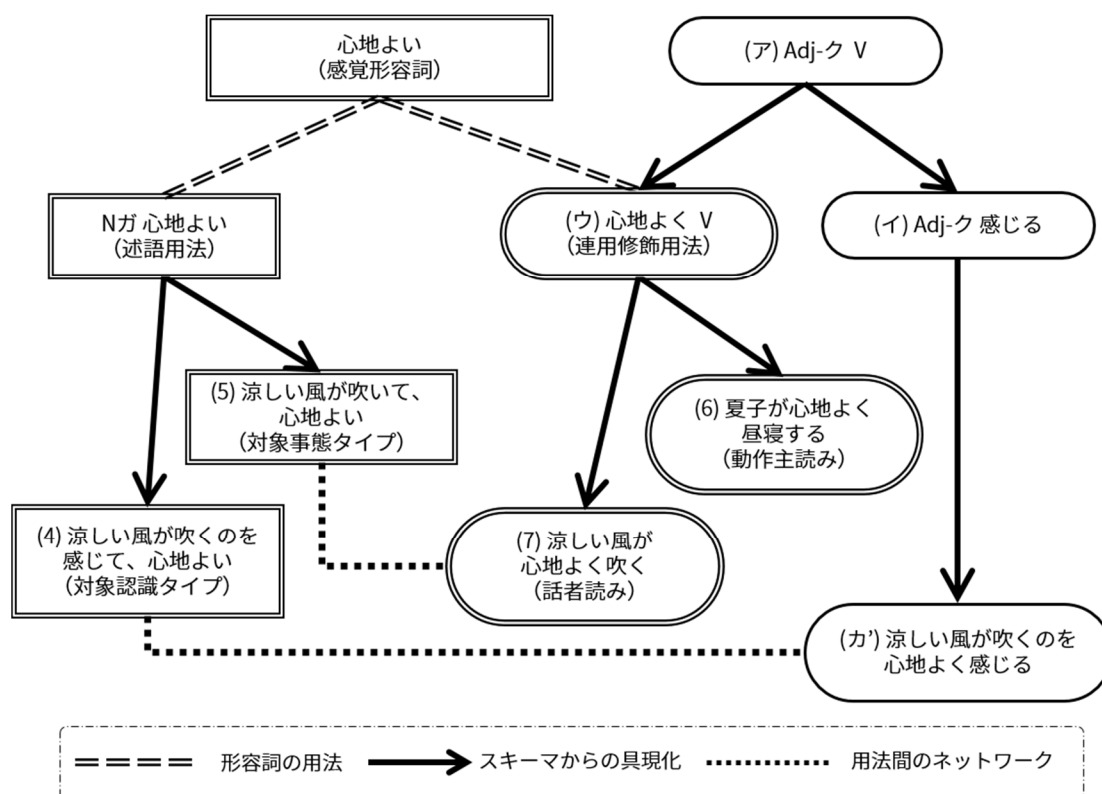


図 3：感情感覚形容詞の用法と形容詞連用修飾の構文・用法間ネットワーク

修飾が中間構文「心地よく V」として融合する ((ウ))。また、感情感覚形容詞の述部用法の対象認識タイプ ((4)) と対象事態タイプ ((5)) がそれぞれ認識動詞構文 (カ') と形容詞連用修飾話者読み ((7)) と用法間ネットワークとして接続する。

こうして、感情感覚形容詞の述部／連用の用法と形容詞連用修飾の構文ネットワークはより大きな構文間ネットワークを構成し、形容詞連用修飾構文の具現化の過程で認識動詞構文も重なることになる。

## 7. 話者読みの成立

(33) 話者読み：デキゴトに内在する意味領域のサマが〈話者に喚起された感情感覚〉で表されるサマである

話者読みは、連用形形容詞に対する【デキゴトに内在する意味領域への詳述指定】への機能的要請と、感情感覚形容詞が表す〈(デキゴトによって) 話者に喚起された感情感覚〉という複合的な読みである。この読み自体が構成的な読みであり、これを理解するには有機的なネットワーク構造を仮定する必要がある。

また、話者に喚起された感情感覚をデキゴトへの情態修飾に用いることは一般的ではなく、これを可能にするためには、デキゴトによる話者の感情感覚の喚起と、認識者・概念化者による事態の主観的把握である「主体化 (subjectification; Langacker 1999, 王 2013)」が複合的な読みの認知基盤として機能していると考えられる。(※話者読みと一般読みの違いも主体化の強化の程度として捉えられる可能性がある。)

## 8. 今後の課題と論点

(34) 形容詞分類からの検証と現象の精査 (感情感覚形容詞がすべて用法間交替できるわけではなく、話者読みも創発的事例の可能性がある (よって、図 3(ウ)から(7)の具現化ではなく、(6)からの拡張の可能性がある)。

(35) 感情感覚形容詞の述部／連用の交替は川端 (1976/1979) の述定／連用装定に関する洞察を想起させる。構文文法の枠組みから、述定／連用装定とその用法間ネットワークはどのように捉えられるか。

(36) 珍しく冬美が欠席した。⇔ 冬美が欠席して、珍しかった。

評価注釈成分も感情感覚形容詞と同様の交替が起こる (工藤 2016)。

## References

- ドラガナ, シュピツァ (2005) 「日本語における動作主認識の副詞的成分をめぐって」『日本語文法』5-1, pp.212-222. ■井本亮 (2018a) 「形容詞連用修飾関係の構文ネットワーク分析」『認知言語学論集』18, pp.466-472. ■井本亮 (2018b) 「書評: 村上佳恵著『日本語の研究』14-2, pp..」 ■井本亮 (印刷中) 「形容詞連用修飾の未確定性をどう捉えるか一文の成分の語用論」加藤重広・滝浦真人 (編)『日本語語用論フォーラム』3, ひつじ書房. ■加藤庸子 (2000) 「感情形容詞の連用用法について」『日本語・日本文化研究』10, pp.71-81. ■川端善明 (1976) 「用言」『岩波講座日本語 6』岩波書店, pp.169-217. ■川端善明 (1979) 『活用の研究 II』大修館書店. ■工藤浩 (2016) 『副詞と文』ひつじ書房. ■永谷直子 (2015) 「動作主認識の副詞的成分を再考する」『日本語文法』15-1, pp.3-19. ■Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter, Berlin/New York. ■Langacker, R. W. (2008), *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press. ■松岡幹就 (2017) 「動作主認識の副詞的成分についての一考察—統語的分布と意味解釈について」『日本語文法』17-1, pp.105-119. ■宮腰幸一 (2009) 「日英語の周辺の結果構文」『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房, pp.217-265. ■村尾治彦 (2013) 「構文」『認知言語学基礎から最前線へ』くろしお出版, pp.205-230. ■村上佳恵 (2017) 『感情形容詞の用法—現代日本語の使用実態』笠間書院. ■仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版. ■王安 (2013) 「主体化」『認知言語学基礎から最前線へ』くろしお出版, pp.181-204. ■劉怡伶 (2012) 「日本語における動作主認識の副詞的成分の特徴: 「\*映画を怖く見ている」とはなぜ言えないのか」『日本語教育』153, pp.81-95.